

「ボトル to ボトル」の水平リサイクルなどでCO2を削減し、循環型社会を実現!

創業125年を迎えた大手飲料メーカーのサントリーは「水と生きる」をテーマに掲げ、持続可能な社会を目指しています。その中で環境ビジョン2050として「水」「気候変動」「プラスチック」の3本柱で活動しているところです。サントリーホールディングス株式会社サステナビリティ経営推進本部 部長 下野晋平氏に、同グループの循環型社会への取り組みについて解説していただきました。

point すでに半分以上が100%リサイクルのペットボトルに転換!

サントリーグループは、冒頭の3つの環境施策において、2030年までの具体的な目標を設定している。水の持続性では、工場の節水を35%削減し、地下水涵養のために取水量以上の水源や生態系の保全などを実施。また、気候変動対策に関しても、自社に国内最大級のグリーン水素工場を作り、GHG排出量の50%削減、バリューチェーン全体で30%削減を目指している。

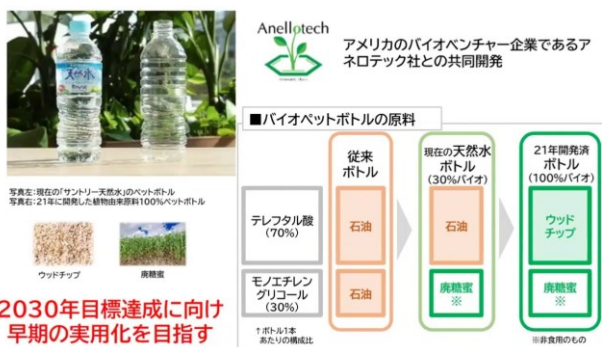


3つ目のプラスチック削減では、現行のペットボトルについて、すべてをリサイクル素材や植物由来素材などに切り替え、化石由来原料をゼロにする方針。以前はマイクロプラスチックの海洋汚染が問題になっていたが、コロナ禍を経て、衛生面や取り扱い面からプラスチックが再評価されている。他国と比べて日本はリサイクル率が85%(2023年)と高く、リサイクル資源に有効活用されている。

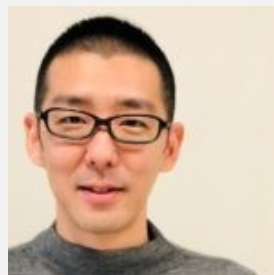
この十数年で使用済ペットボトルを新たなペットボトルに再生する「ボトル to ボトル」の水平リサイクルが可能になった。化石由来原料を使わずに資源を循環させることで、CO2排出量を約60%削減できる試算だ。国(環境省)や自治体もReduce(リデュース)に加えて、こういったリサイクルを重点戦略としている。サントリーグループでは、2023年には2本に1本が100%リサイクルのペットボトルになった。商品ロゴマーク導入、TVCMやYouTubeでのリサイクル啓発活動にも積極的に取り組んでいる。

point 米国企業と植物由来原料100%ペットボトルの開発に成功!

同社では、植物由来原料100%のペットボトルの開発にも成功している。米国のバイオベンチャー企業・アネロテック社との共同開発品で、ウッドチップや非食用の廃糖蜜を利用したもの。これによりCO2の大幅削減に向けて、早期実用化を目指していく構えだ。さらに、ペットボトル以外にも、レジ袋や弁当容器などの再資源化に向けて、業界を超えた12社による共同出資会社の株式会社アールプラスジャパンを設立。2024年5月時点で44社まで参画が広がっている。



これらの取り組みは、行政・業界団体・教育機関・消費者といった多くのステークホルダーを巻き込んだ連携強化が不可欠となる。実際に兵庫県などの自治体では、事業者が住民から回収するペットボトルを引き取り、同社指定のリサイクラー経由で、「ボトル to ボトル」への水平リサイクルを実施する協定を約260の市町村と結んでいる(2024年11月現在)。また、法人や学校など40以上と協定を結び、分別の理解も進めている。



下野 晋平 氏
サントリーホールディングス株式会社
サステナビリティ経営推進本部部長

問合せ先

一般社団法人SDGsデジタル社会推進機構(ODS)

info@ods.or.jp

※お問い合わせの際には「ウェビナー通信を見た」とお伝えください



サントリーホールディングス株式会社
取り組みページ

大阪→香港→東京→インドネシア
→シンガポール→東京、とアジアの各都市にて勤務。専門領域は財務会計・事業開発・デジタルコマース・サステナビリティ。